

特別講演

主催 埼玉医科大学 国際医療センター 感染対策室, 後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会
平成19年5月2日 於 埼玉医科大学 創立30周年記念講堂

感染対策の実際 — VRE 事例からの教訓

賀来 満夫, 加来 浩器

(東北大学 感染制御・検査診断学分野)

今回は、埼玉医科大学と国際医療センターでみられたVRE（バンコマイシン耐性腸球菌）事例への対応に関して、東北大学感染制御・検査診断学分野の賀来満夫教授と加来浩器准教授に御講演いただいた。まず加来准教授には、感染症学の専門家として、実際に北九州で起こったVRE感染事例に対応された経験をもとに、実地疫学調査の方法についてお話いただいた。

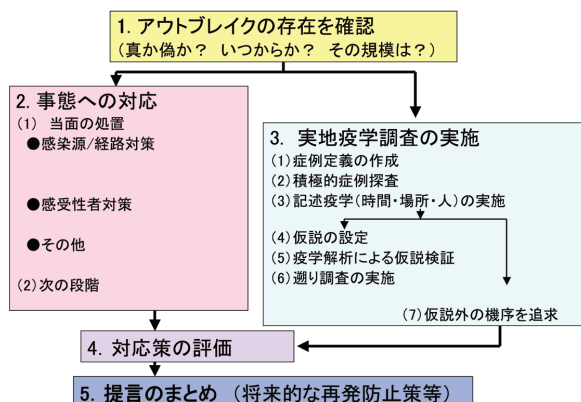


図1. アウトブレイク発生時の基本ステップ。

VREとはどういう菌か、病院におけるアウトブレイク時の対応はどうすべきかについて、当時の行政の対応も含めて非常に具体的な内容であった。感染予防の3原則として、作らない(抗菌薬の適正使用による耐性菌増加の抑制)、移さない(医療従事者や器具を介した拡散の防止)、持ち込ませない(ゾーニングや積極的症例探索と早期対応)をあげていただいた。

賀来満夫教授からは、「感染制御におけるパラダイムシフト」という題で、感染症・感染制御の難しさを再認識し、リスクコミュニケーションの重要性と地域も含めたネットワーク構築について、御講演いただいた。重要な点は、医療安全・医療の質保障・危機管理の観点から、現在何が最も問題であるのかを再チェックして優先度に基づいた戦略を構築することである、と指摘された。また、感染症についての情報を共有化することが非常に大事であり、医療従事者としてこの難しい問題に連携して取り組んでいきたいと思います、という、力強い応援のメッセージの込められた講演であり、職員一同気持ちを新たにしました。

(文責 光武耕太郎)

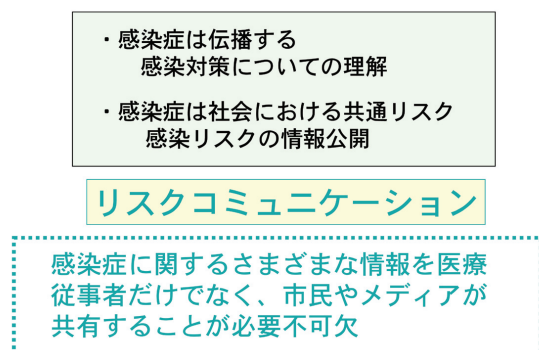


図2. 感染症に関する情報共有化の重要性。

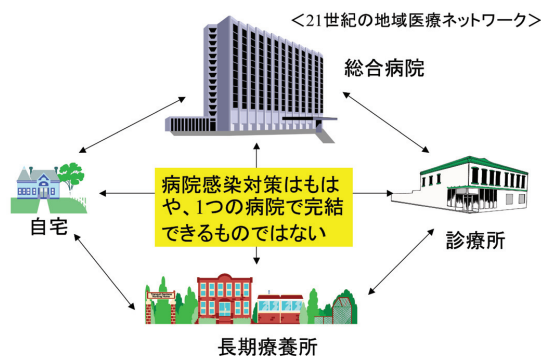


図3. 地域医療と病院感染対策。